アグリ★ルネッサンス

農業経営きょうと

No.116
2025.春

新たな発想で持続可能な米づくりをめざす山岡泰斗さん（右）・怜亜さん（左）兄弟

CONTENTS

クローズアップ　この経営者！…… 2ページ
米づくりと京丹後への想いを込めて
― 音楽の力で農業の楽しさを発信 ―
有限会社久美浜観光園（京丹後市）

チャレンジ農業法人 …… 4ページ
清潔な環境とリスク管理でより安全な卵を食卓へ
― 地域社会との信頼関係に力を注ぐ ―
有限会社みずほファーム（船井郡京丹波町）

新規就農セミナーに60名が参加 …… 6ページ
最新のスマート農業を学ぶ …… 6ページ
農業法人設立講座を開催しました…… 7ページ
雇用就農資金…… 7ページ
農業法人ニュース…… 8ページ
― 京都府農業法人経営者会議の取り組み ―
■京都府農林水産部・近畿農政局との意見交換会
■交流サロン
編集局から…… 8ページ

クローズアップ
この経営者！

米づくりと京丹後への想いを込めて

―音楽の力で農業の楽しさを発信―

「静」の泰斗さん（左）と「動」の怜亜さん（右）
見事な連携で農業のイメージを一新

京丹後市・有限会社久美浜観光園

山岡泰斗（たいと）さん（24）・怜亜（れいあ）さん（20）

京丹後で特別栽培米のコシヒカリや新羽二重糯（もち）などを大規模生産し、作業受託も請け負う「(有) 久美浜観光園」。農園の次世代を担う若き兄弟が、米の生産・販売などを手がける傍ら、ヒップポップ調の楽曲を動画サイトで発信している。販路の確保とともに「農業に興味を持つ若者を増やし、丹後地域を盛り上げたい」と意気込む。

田植え体験フェスを開催

見渡すかぎりの田んぼと山。コウノトリも飛来するという圃場に伸びやかな歌声が響けば、そこは京丹後の大自然が演出するライブ会場に早変わりする。「ここで５月に農業体験フェスをやったんです。音楽を爆音とどろかせてノリノリで田植えをしたり、軽トラを２台つなげた特設ステージで歌ったり…」と楽しそうに話す山岡怜亜さん(20)。もう一人の仕掛け人、兄の泰斗さん (24) も「魅力を発信するイベントをいろいろ企画していきたい」と相づちを打つ。

山岡兄弟は、代々の米農家で30年前に法人化した久美浜観光園の３代目。「きつい・汚い・危険」という“農業の３K”イメージを覆そうと、音楽と田植えを楽しむ農業体験イベントを開催するなど、農作業を通じて新たな人とのつながりを築いている。人前に出ることが好きな怜亜さんが観光園の広告塔を担い、経営分析が得意な泰斗さんが販路戦略を練る。農園運営の要諦は、その「動」と「静」のコンビネーションにある。

当面の目標は田んぼのオーナー制と「やーまんブランド米」の販売

自動操舵トラクター

ドローンによる種まき

農園の若き主要メンバー
（左から泰斗さん、怜亜さん、スタッフの千賀大知さん）

「市場調査は欠かせない」

観光園の経営は、経営面積27ha と作業受託（全面受託1ha）の28ha。

兄の泰斗さんは大学時代、アルバイト先の飲食店で店長から「経営」についてたくさん学び、経営分析の面白さを知った。実家の財務諸表をチェックしたところ「自分ならもっと経営改善ができる」と確信し、卒業後は京丹後へUターン。弟の怜亜さんと２人で販路開拓に乗り出し、「ビジネスチャンスをつかむには市場調査が欠かせない」と、法人にマーケティング部門を設けた。

大阪など都市部で開かれる商談会には積極的に参加して大阪、和歌山などにも販路を広げ、売り上げも順調に拡大。さらに、泰斗さんは中小企業診断士の取得もめざしており、経営スキルのアップに余念がない。

音楽で農と人とをつなぐ

音楽と田植えのイベントで異彩を放つのは、「Paddy Boy やーまん」こと、農業と並行して音楽活動も行う怜亜さんの存在だ。

怜亜さんは、音楽の力で農業のイメージを変えたいと、レゲエやヒップホップ調の自作曲を「YouTube」や「Instagram」、「TikTok」といった SNS 媒体に投稿。幼いころから野球を続け、高校は強豪の鳥取城北高校へ進学、甲子園に出場できなければ憧れていた農業を継ぐつもりだったという。「…やーまん」とは高校時代のあだ名をもじった名前である。

大自然の京丹後の地で、先進技術を取り入れた自動操舵システムのトラクターや田植え機を使って軽快に農作業をこなし、歌詞はそんなとき頭に浮かんでくるそうだ。こうして生まれた代表曲の一つ『明日笑えれば』は、温かく包むような歌詞と爽やかな歌声で再生数は２万回を超える。その明るい人柄は農家としてもアーティストとしても人を惹きつけ、地元のファンだけでなく、Z 世代を中心に全国的にファンを増やしている。

BtoCで消費者の開拓へ

持続可能な農業を実現するために、泰斗さんは「作業時の人材配置の改善や、区画整備、スマート農業技術の導入など、生産効率を上げる工夫が必要だ」と考えている。マーケティング面では、怜亜さんが中心となり、カフェとのコラボイベントや田んぼのオーナー制の新設など、新たな消費者を開拓するため「B to C」に力を入れていく計画だ。

「将来的には、より多くの農家さんにとっての有利な販売の窓口として機能できたら」と泰斗さん。怜亜さんは「農業の楽しさや京丹後の魅力を発信し、全国の誰もが知る地域にしたい」というのが夢だ。新しい発想を持った若い兄弟が京丹後の魅力を発信しながら持続可能な農業を目指す、これまでにないタイプの後継者たちの出番である。

音楽を通じて農業の魅力を発信する「やーまん」こと怜亜さん

圃場の集約化による作業効率の改善が課題
（左は、兄弟の父・久美浜観光園代表取締役の山岡精紀さん）

（有）みずほファームの全景

清潔な環境とリスク管理で より安全な卵を食卓へ

― 地域社会との信頼関係に力を注ぐ ―

チャレンジ農業法人

有限会社 みずほファーム

船井郡京丹波町

■代表取締役　桑山直希
■設立年月　1988年11月
■資本金　4,000万円
■労働力　役員3名、正社員14名、常勤パート40名（主に直売所や GP センター）
■事業内容　鶏卵、直売所経営、たまごかけご飯専門店、親鳥販売・加工販売
■経営規模　採卵鶏7.5万羽

生卵が食べられるのは日本だけ

京都縦貫自動車道・京丹波みずほ IC 付近を通りかかると「みずほファーム」と大書された黄色いパネルが目に飛び込んでくる。（有）みずほファームは1988年、鶏卵卸である「ナカデケイラン」（本社・京都市）の子会社として設立された。鶏舎の隣には GP センター（鶏卵の選別・包装施設）があり、大量の卵がベルトコンベアで直接搬入され、洗浄・殺菌・選別・パッキングなどがすべて自動で迅速処理される。

「生卵が食べられるのは日本だけ」と社長の桑山直希さん（54）。海外では卵の「生食文化」がなく、日本ほど徹底した衛生管理が行われていないためだ。

同ファームは2019年、畜産クラスター事業で GP センターの全面リニューアルを実施。極小ハンマーで叩いた反響音でひび卵を発見する装置や、精密なモニター検査、卵の表面を殺菌する紫外線照射装置など、サルモネラ菌のリスクを防ぐために最新設備を導入し、生で安心して食べられる卵の生産体制を整えている。

「なによりも地元の方々の理解が不可欠」代表取締役の桑山直希さん

消費者とのつながりあってこそ

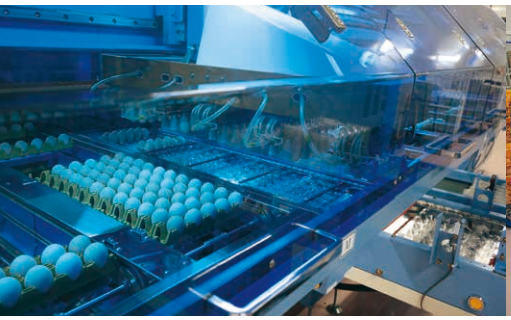
桑山さんは、「別寅かまぼこ」創業家の家系の出身で、同社の製造部門を担当していたが、2013年、奥さんの実家がグループで営んでいた「みずほファーム」と親会社「ナカデケイラン」の経営を託された。事業承継した当時、知名度はあまり知られておらず、マルシェに出店しても売り上げは芳しくなかったという。

そこでロゴ制作をはじめ、ブランディングを専門会社に依頼。自身の恰幅のよいキャラクターを生かし、実写看板を鶏舎に隣接する直売店に掲げた。いまではロゴ入り T シャツを着て配達に行くと、「みずほのおっちゃん！」と声をかけてもらえることも。「京丹波町ふるさと納税返礼品になったことや、地元消防団で出会った人たちとのつながりがなければ、ここまでの成長はなかった」と桑山さんは振り返る。

販売はナカデケイラン経由で京都生協、滋賀生協のほか、府内に「みずほ店」など直売店３店舗を構え、亀岡市「西別院店」ではたまごかけご飯店も併設している。「消費者からも生産者の顔が見えることが大切」というのが持論だ。

（有）みずほファームの GPセンター

GPセンターでの洗浄／殺菌／選別／パッキング



GPセンターは衛生管理と迅速処理が“命”

「工場が美しくなることは楽しい」
自ら現場の清掃に取り組む

発酵鶏糞の利用促進をめざして

長年、卵は“物価の優等生”といわれてきた。一方の生産者からみれば、売り上げは安定していても手元に残る利益は決して大きくはない。加えて、「飼料価格の高騰を受けて資金繰りは厳しい」という。

鶏糞処理のコストも頭の痛い問題だ。みずほファームでは、日々約7.5ｔ排出される鶏糞の大半を発酵肥料としてベトナムへ輸出している。しかし、輸送費がかかって利益にはならず、産業廃棄物として処理するよりいくらかコスト節減になる程度だとか。

「鶏糞は取りに来てもらえたらタダであげます」と桑山さん。化成肥料が値上がりしているなかで、農家に発酵鶏糞をうまく利用してもらえれば、Win-Win の関係が築くことができるのでは、と期待をかける。現在、発酵鶏糞をより利用しやすくするためにペレット加工の計画を進めるなど、地元農家との新たな連携を模索中という。

食卓を支えている自負を胸に

みずほファームは飼養羽数的には中規模の経営体だが、ナカデケイランの持つ販売網の強みや直接契約による販路の拡大もあり、採卵養鶏における法人の事業収入の全国平均を上回る年商９億円を達成している。

健康な鶏がおいしい卵を産む

鶏卵は国内97％の自給率であるのに、「飼料の自給率はわずか９％。気候変動や不安定な国際情勢を考えると、自給力をもっと養うべきだ」と、府養鶏協会の会長でもある桑山さんは説く。餌に飼料用米を配合しているのもその一環だという。

しかも養鶏は外的要因に影響を受けやすく、鶏インフルエンザなどの大きなリスクもはらんでいる。「頑張っても結果の見えにくい業界」（桑山さん）と言いながらも、採卵養鶏を続けているのは、消費者の毎日の食卓を支えているという自負があるからだ。

自身の実写看板を掲げた直売店（みずほ店）

こだわりのブランド卵：葉酸たまご・くろ丹波・さくらたまご・京乃雅など

オリジナル商品の数々：京丹波鶏カレー・たまごかけ醤油・たまごマヨネーズなど

新規就農セミナーに60名が参加

８月25日、府と農業会議は京都市内で「新規就農セミナー」を共催し、近畿各地から21歳から67歳までの就農希望者60人が参加しました。セミナーでは、非農家出身ながら就農を実現し、経営を確立した上村慎二さん（かみむら農園・八幡市）と石原麻美子さん（アイエスボタニカ・京都市）が講演を行い、農業経営の現実と魅力を語りました。

上村さんは「農業の『業』を目指すのか、農的な暮らしを目指すのか、まず目標をはっきりさせよう」と呼びかけ、石原さんは「失敗が許されるのは研修の間だけ。逆算して研修中の失敗を就農後に活かす心構えが必要」とアドバイス。厳しさの中にある農業の喜びについても力強く語り、参加者に深い印象を残しました。

セミナー終了後に実施されたアンケートでは、「実体験に基づく具体的な話が聞けて勉強になった」、「経営面の厳しさがよくわかり、気を引き締めて就農に向けて進みたい」などの感想が寄せられ、参加者の多くが就農への意欲を新たにした様子でした。

また、講演後には相談員との個別相談会を実施。相談に参加しなかった方も、講師を囲んでのフリートークで和やかな時間を過ごし、就農への夢や目標について語り合う場となりました【写真】。

最新のスマート農業を学ぶ

●京都スマート農業勉強会

12月に、府と農業会議は「施設園芸を中心としたICTの活用」をテーマに綾部市と亀岡市で「京都スマート農業勉強会」を開催し、スマート農業に関心のある農業者や自治体職員ら延べ134人が参加しました。スマート農業を実践されている杉田充さん（京田辺市）と武田敏和さん（舞鶴市）が事例紹介を行い、10企業が環境制御システムなどの展示を行いました。参加者からは「実体験に基づいたお話が聞けて良かった」「ICTの重要性を理解することができた」と好評でした。

●スマート農業に関するよろず相談会

1月に、府と農業会議は「スマート農業に関するよろず相談会」を開催し、府内の34の農業経営体が相談に訪れました。相談では、農業会議の専門家がICT機能を掲載したトラクターやコンバインなどの有効活用による生産額向上の方法などについて説明を行いました。

京都府農業会議内にはスマート農林水産業窓口があります。お気軽にご相談ください。（電話075-417-6888）

農業法人設立講座を開催しました　京都府農業会議

ディスカッションの様子（集落営農編）

農業会議は、昨年12月に税理士と社労士を講師に迎え、法人設立の手続を学ぶ「農業法人設立講座・一般編」を、1月には集落営農の専門家である森本秀樹氏を講師に「集落営農編」を実施しました。一般編には15名、集落営農編には9つの組合から15名が参加し、活発な議論が交わされました。

法人化については「法人化すればすべての経営課題が改善する」との誤解があるため、それぞれの講座で1時間以上のディスカッションを設けました。参加者からは「法人化の前に、まず経営計画をしっかり立てる必要がある」との意見が多く聞かれました。

特に集落営農編では、アンケートを通じて「まず集落全員での営農計画の話し合いが大事だ」「後継者ができるような組織にしなければならない」といった声が寄せられました。法人化はあくまで手段の一つであり、成功の鍵は綿密な計画と組織作りにあることを再認識する機会となりました。

今後も、より実践的な内容を取り入れながら、農業経営者の皆様に役立つ講座を開催していきたいと考えています。

雇用就農資金の活用で、農業人材を育成しながら、経営強化につなげませんか！

京都府農業会議では、50歳未満の就農希望者を新たに雇用して、次世代の農業人材を育成する農業法人等に、月額５万円（年間60万円×４年間）を助成する雇用就農資金に取り組んでいます。

この制度では、年間を通じて農畜産業の生産を営む農業法人等が、正社員として新規雇用し、農業法人等が設置する研修指導者のもとで、生産に必要な技術や知識について、実践的に研修していただきます。

令和５年度は、54経営体72名に約4.300万円を助成しており、令和６年度では、新たに45人の雇用就農者が研修を開始されました。

令和７年度の最初の第１回募集が３月４日から開始予定で、初めて応募される農業法人等を対象に、３月12日（水）に自治会館で応募説明会を開催する予定です。

農業経営の発展に活用できる制度ですので、是非ともご検討ください。

詳しくは、法人支援室（075－417－6848）にお問い合わせください。

農業法人ニュース

（経営者会議事務局）

―京都府農業法人経営者会議の取り組み―

■京都府農林水産部・近畿農政局との意見交換会

当初、８月28日の開催予定だった京都府農林水産部との意見交換会が台風10号の接近で10月28日に延期され、会員等35名の参加がありました。

京都府農林水産部　小瀬部長の挨拶の後、「京都府農林水産業人材確保育成戦略（仮称）」や「地域計画の策定・実現に向けた取り組み」について話題提供があった後、「農業法人をとりまく情勢等」をテーマに意見交換が行われました。

意見交換では、「地域計画の周知不足と参加者が少ない。」「地域計画での地域とは。」「人材戦力で、どこかに農業法人という文を」「最低賃金の値上げ」「人材確保」「鳥獣被害対策」等多くの質問や意見が出されました。

経営者が抱える課題について、共有することができた良い意見交換会になりました。

京都府農林水産部との意見交換会

また、12月４日には近畿農政局との意見交換会が開催され会員等39名の参加がありました。

最初に、近畿農政局から「食料・農業・農村基本法改正法の概要」「みどり認定」「輸出拡大に向けた取り組み」「食料の安定供給のための農地の確保及びその有効な利用を図るための農業振興地域の整備に関する法律概要」「令和６年度農林水産関係補正予算の概要」について話題提供をいただき、その後、「農業法人をとりまく情勢等」をテーマに意見交換が行われました。

意見交換では、「最低賃金と価格転嫁」「スマート農業」「飼料高騰」「６次産業化に伴う機材等の支援対策」「農産物の合理的価格」「高温対策」「地域計画に伴う基盤整備支援」「地域計画の周知」等、経営者が抱えている課題について話し合いが行われました。

「最低賃金の改正や価格転嫁、資材・飼料・原油等価格の高騰は、経営者の収益を減少させ農業経営がもたない。賃上げと価格転嫁のスピード感を合わせた対策を」等、経営者が抱えている実情を直接伝えることができた意見交換会となりました。

近畿農政局との意見交換会

■交流サロン

毎年、北部会場、南部会場で開催をしている「交流サロン」、今年度は会場を城陽市内にあるLOGOS LAND プライムイン城陽に変え二日間の日程で開催しました。

交流サロンは、経営者会員、農業経営者、行政等関係団体職員が集い農業経営で抱えている課題等について情報、意見交換を行い、親睦を深めること目的に開催、19名の参加がありました。

１日目は、経営者会議会員（株）京都杉田農園の最新のハウスでトマトの施設栽培を見学、栽培管理方法等、熱心に質問されておられました。

その後、LOGOS LAND プライムイン城陽に場所を移しで交流会を開催、出席者から、現在抱えている経営課題や検討中のビジネスプランを発表し、出席者の意見を聴きながら次のステップに進むための手応えや感触を確認されていました。

２日目は、木津川市山城町で山城ねぎの生産を行っている（株）秋田農園を視察、ねぎの植え付けから収穫計画等関心を持って耳を傾けておられました。

編集局から

◆未だ未だ暑さが残る10月下旬、京丹後市久美浜町でユニークな農業に取り組む若い兄弟がいる（有）久美浜観光園と京丹波町で徹底した品質管理に取り組む（有）みずほファームでお話をお聞きしました。

農業資材高騰、人材不足、人件費の増加等、農業経営を取り巻く情勢が厳しさを増している中で、スマート農業、ICT農業に取り組まれ、着実に販売実績を上げておられました。

お話をお聞きしながら、地域と人との結びつきを大切にする思いが、誰とでも話が出来る力を身につけ、接客や営業販売に結びついているのだなと感じました。

今後とも持続可能な農業への取り組みと地域貢献に頑張っていただきたいと思います。

発行／2025年３月
発行者　（一社）京都府農業会議
〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内　TEL.075(417)6847